

「共生」の視座に関する一考察**一人間の〈弱さ〉を論拠として**

○ 社会福祉法人白石陽光園 共生型グループホームながさか 笠松 剛士 (会員番号 008819)

田中 治和 (東北福祉大学・会員番号 000116)

キーワード：共生 人間観 弱さ

1. 研究目的

本研究の目的は、人間が「共生」をしていくために必要な視座を考察することである。「共生」の重要な基礎となるものは、高田（2011：38）が法然を引合いにだし述べるように「人間みんな、ちょぼちょぼ」という人間の平等観である。しかし現実でそれができない理由として、尾畑（1995：241）は「私たちが、どういう理由であろうとも、自分を正しいものとして絶対化するかぎり、他を差別し、抑圧し、排除し、隔離することは必然です—中略—その結果、あらゆる人々と共に生きたいという共生感覚を見失う」とし、さらに「要するに問題は、自分の思いを突き破るような万人平等の世界に目覚めることにおいて、「我と我が世界の絶対化」を問うということ」としている。しかし、何故「我と我が世界」を問う、もしくは批判するといった原動力がどこから来るのであろうか。

「共生」は、耳触りの良い、やさしい響きをもち、誰しもこれを首肯する言葉であろう。しかし本研究では、批判的観点から、いかにすれば「共生」を可能とする端緒が開かれるのであろうか、それを考察していきたい。

2. 研究の視点および方法

本研究の出立点は、東日本大震災を体験したことにある。あの震災で人はいかにも無力であり、弱いということが痛感させられた。日頃職員という立場、教員という立場が偽りの相対的〈強さ〉であったことを厳しく問われたところである。だが、人間の〈弱さ〉、とりわけ職員等側の〈弱さ〉が露呈されたとき、わずかではあるが、その場、その時間において「共生」を垣間見ることができたのではなかろうか。

そこで本研究では、人間の〈弱さ〉を「共生」を可能とする機縁とする仮説に立ち、人間がもつ〈弱さ〉に係わる先行研究及び文献を講読し、捉え直し、自らの社会福祉実践者との関連をも吟味し考察していく。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従い、引用・参考文献等を明記するなどの倫理的配慮を行った。

4. 研究結果

弱さの研究は、辻（大岩）、高橋、鷺田等が行っており、サティシュ・クマール with 辻（2010：51-52）では、力について「パワーとは「いる」力、フォースとは「する」力〔中略〕人間はヒューマン・ドゥーイング（する存在）ではなく、ヒューマン・ビーイング（いる存在）です」と述べ、フォースを持たない人こそ「弱き者」という捉え方であり、真の

力だと述べている。高橋（2013：165）は「「弱さ」こそが、わたしたちの本性なのかもしれない」と述べ、人間は「弱い」生き物であるが、それを忘れてしまっていると考察している。鷺田（2014：227）も「弱い者こそ、他者を深く迎え入れることができるのだ。〈わたし〉をほどこきあえる」とし、〈弱さ〉が人との係わりの中で重要だとしている。またすでに、実践者であり、社会福祉原理論を考究した塚本（1964：13）も親鸞の思想を用いながら「どうにもならない弱さを持った人間であるということを知覚し、反省することです」と実践者自身の姿勢を述べている。べてるの家の向谷地（2002：196）も「「人間とは弱いものなのだ」という事実に向き合うことが重要だと述べている。支援者、被支援者という枠組みを超えて、人間がすべて〈弱い〉という出立点に立つことを示唆している。

村瀬（1995：184-186）は、要介護者等を支える根拠の人間像を、誕生から死という人間の生涯、とりわけ死の意識を観点におく倫理に求めている。そして、被災地での孤独死を凝視した額田（1999：248）は共生について「“倫（共）に生きる理（理屈）”というふうに、倫理という概念を共生の理念」と捉え直している。

5. 考察

この世に生きる人間の基調は、けっして強さではなく〈弱さ〉ではなからうか。誰しもその初めは、弱々しく、生きる営みの大半を他者に依存する赤ちゃんであり、長寿の結果としての老、そして必ず死に至る存在である。それゆえ、この人間観・人生観に依拠し、一人一人が〈弱さ〉を大事にし、互いに認め合うことで「共生」が開かれていく端緒になるのではなからうか。

謝辞

本研究は、東北福祉大学感性福祉研究所感性福祉研究センターが実施している、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業における G1-2 チーム『「災害」が社会福祉、ソーシャルワークに与えた衝撃とそれへの対応に関する研究』の研究成果の一部である。

引用文献

- 大岩圭之助（2013）「弱さの研究」明治学院大学国際学部附属研究所共同研究報告
- 尾畑文正（1995）『歎異抄に学ぶ—共生の原理を求めて』明石書店
- サティッシュ・クマール with 辻信一（2010）『今、ここにある未来』ゆっくり堂
- 浄土宗監修 高田公理編（2011）『ともいきがたり—法然共生フォーラム』創元社
- 高橋源一郎（2013）『一〇一年目の孤独—希望の場所を求めて』岩波書店
- 高橋源一郎・辻信一（2014）「弱さの思想—たそがれを抱きしめる」大月書店
- 塚本哲（1964）『心の相談室—カウンセリングと人間性』誠信書房
- 額田勲（1999）『孤独死—被災地神戸で考える人間の復興』岩波書店
- べてるの家（2002）『べてるの家の「非」援助論—そのままがいいと思えるための 25 章』医学書院
- 村瀬学（1995）「新装版「いのち」論のはじまり」洋泉社
- 鷺田清一（2014）『〈弱さ〉のちから—ホスピタブルな光景』講談社